

「因縁は救いの原点」

「因縁」は、『岩波仏教辞典』によれば、「すべては因縁によって生じていると説き、因縁は仏教思想の核心を示す語である。」とあるように仏教の核心を示している言葉です。

仏教は、釈尊が苦を乗り越えるために修行に入られたことに端を発する宗教です。

釈尊は、苦を乗り越えるために、「因縁」というものの見方考え方を採用されました。

仏教にとって、苦からの救いの原点に「因縁」はあったのです。

現代人にとっては、NHKニュースでさえ「因縁」を「難癖をつける」などの意味で使うこともあり、仏教のイメージを暗いものにしていきます。

これは、他者を貶めることで自分が優位に立とうとする人間の煩惱からきているのでしょう。

「煩惱」は『禅学大辞典』によれば、「心身を悩乱して、寂静ならしめない諸種の心の作用・性質・状態などをいう。」とあります。心身が悩み乱れる心は、全部「煩惱」になります。

同じく『禅学大辞典』の煩惱の代表たる貪瞋痴を意味す

る「三毒」を見ると、煩惱の凡その成り立ちが見えてきます。

私に対して、人でも物でも何かが対立すると「私」という意識が立ち上がります。「私」という意識が立ち上がると次に「私のもの」という意識が湧き上がるのです。

そこで、「私のもの」に囚われてしまうと欲望が際限なく湧き上がります。

すると、その「私のもの」にしがみつき、貪りの心が起きます。

さらに、「私のもの」に危険が迫り侵されると感じた時、「私のもの」を守ろうとして瞋り（いかり）の感情が立つのです。

その「私のもの」にしがみついてしまう意識には、本来、よりよく生きるための道具である「欲望」や「感情」に引きずられてしまう歪んだ「もの」の見方考え方、つまり痴さがあります。

このように煩惱も、成立条件と契機に諸々の段階があります。

つまり、「煩惱」ですら因縁によって成り立っているのです。

自分個人より仏教の権威を貶め蔑むことで少しでも自分個人が優位に立ち、自分の苦があったとしてもそれを胡麻

化するために「坊主憎けりや袈裟まで憎い」などと「因縁」という言葉に難癖をつけているのでしょう。

本来は、松原泰道師が『盂蘭盆経を読む』の中で言うように「釈尊は、因にはたらきかけることにより、因を変えることができる真理をさとられたのです。この真理が縁です。縁は、契機・条件です。」とあるように、「因縁」は、釈尊が悟られた真理なのです。

この因縁という真理によって、人は生まれによって決められることはない、一人一人の努力によって生き方を変えることができるのだと、仏教が開かれた教えの根本になったのです。

『仏教学辞典』によれば、「一切の存在はすべて因縁によって生じ因縁によって滅する。」とあるように、私たちに見えている一つ一つの存在も生じる条件の集合体であり、そこには、本体も実体もなく、その条件の離合集散によって、生じたり滅したり変化し続けているのです。

鎌倉にある大本山円覚寺の管長猥下である横田南嶺老師の『いろはにほへと三』に、仏教の教えの一つである「華嚴経」の因縁の見方があります。

「世の中に存在している私たちのいのちも皆さんのいのちも、木や草や鳥にいたるまで、別々のいのちのように見え

ますが、実は網の目の珠のようにつながっていて、別々のものは一つとしてないのです。

お互いが支えながら存在するのであって、一つだけ取り出すことはできない。私という一人の人間も、あらゆる人、全体と関わり合いながら生きている、生かされているという教えです。」

一つ一つの存在は、私たちが一つ一つと別個に見ているだけで見えていないところでは、全体として関係しあい支えあって生きている、生かされているのです。

自分が、確りと存在するためには、その支えの関係にあるものも確りと存在していなければいけません。

支えの存在が煩惱に苦しんでいては、自分も苦しみに引き込まれてしまいます。

逆に、自分が苦しんでいるとすれば、自分にとって支えの関係にあるものが苦しんでいるかもしれないのです。

苦しんでいるものに、何かしらの救いの手を差し伸べることができれば、自分自身の苦しみに引き込まれてしまう弱さを克服する道になるのです。

釈尊の十大弟子の一人である目連尊者の「盂蘭盆会」の因縁話があります。

ある時、目連は、親を仏教で救おうと世間を見てみまし

た。すると、亡き母が皮と骨ばかりの姿で餓鬼に生じて、倒懸の苦しみにいるのを見てしまうのです。

驚きと悲しみから鉢にご飯を盛って勧めるのですが、餓鬼になった母が手に取ると口に入る前に火となって燃えてしまいました。目連は、泣き叫んで釈尊にすがります。

釈尊は、目連に修行僧の懺悔し過ちを改める期日である七月十五日に、その修行僧にご馳走や品物をお供えしなさい、その徳によって、現在の親、ご先祖を救うことができると教え諭します。

松原泰道師は『盂蘭盆経を読む』で「倒懸」は「倒見」に通じるといいます。

倒見から正見へ、欲望や感情に引きずられた歪んだ見方考え方に気づき、自分を省みることで真直ぐ正しい見方考え方への教えが「盂蘭盆会」にはあるといえます。

「目連は気づきました。母は私を愛するあまり、過ちを犯されたのだ。母を餓鬼にさせたのは私である。母を救うには、私が正しい教えを聞いて救われる以外に道はない、師の釈尊は私に示唆なされたのだと彼ははじめて目が覚めました。」と松原師は言います。

目連は、母と子の因縁、師と弟子の因縁の中で、母を救うには、自分が救われること、さらに母を救うことが目連

自身を救うことだと気づいたのです。

餓鬼に堕ちた母にとっての救いとは、心の飢餓状態から周りの言葉、目連の最初の差し伸べた手すら受け付けない嫌悪の心から皆からの多くの差し伸べる手による心の変化です。「嫌い」からの解脱です。

目連の母は、わが子の目連が釈尊の教えを聞く縁によって救われたのです。

「因縁」に気づき、他者の煩惱を救おうとすることが、自分自身の煩惱を克服する道になるのです。「因縁」は、自他を救う道の原点になるのです。

参考資料

『岩波仏教辞典』 岩波書店

『禅学大辞典』 大修館書店

『仏教学辞典』 法蔵館

『盂蘭盆経を読む』 佼成出版社 松原泰道師著

『いろはにほへと三』 大本山円覚寺 横田南嶺老師

『仏教聖典』 仏教伝道協会